高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う

高槻市上牧町

上牧遺跡の調査

淀川流域における古墳時代集落の発掘調査成果

公益財団法人　大阪府文化財センター

～ごあいさつ～

公益財団法人大阪府文化財センターでは、西日本高速道路株式会社関西支社の委託を受けて、高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線（新名神高速道路）の建設事業に伴う上牧遺跡の発掘調査を実施しています。平成29年11月から調査を開始し、現在までに全体の約3分の1の面積にあたる約4,000㎡の調査が完了しており、これまでに古墳時代の集落跡や中世以降の耕作痕跡などがみつかっています。その中でも、古墳時代の遺構や遺物が特に多く、古墳時代初頭～後期前半頃（3世紀前半～6世紀前半、1,800～1,500年前）まで長期間にわたって継続する集落の様子が徐々に明らかとなってきました。そこで今回は、竪穴建物が13棟まとまってみつかったP5区と、周溝墓が5基みつかったA－2区を対象に、古墳時代の成果を中心にして発掘調査現場の様子を公開いたします。

1．上牧遺跡とは

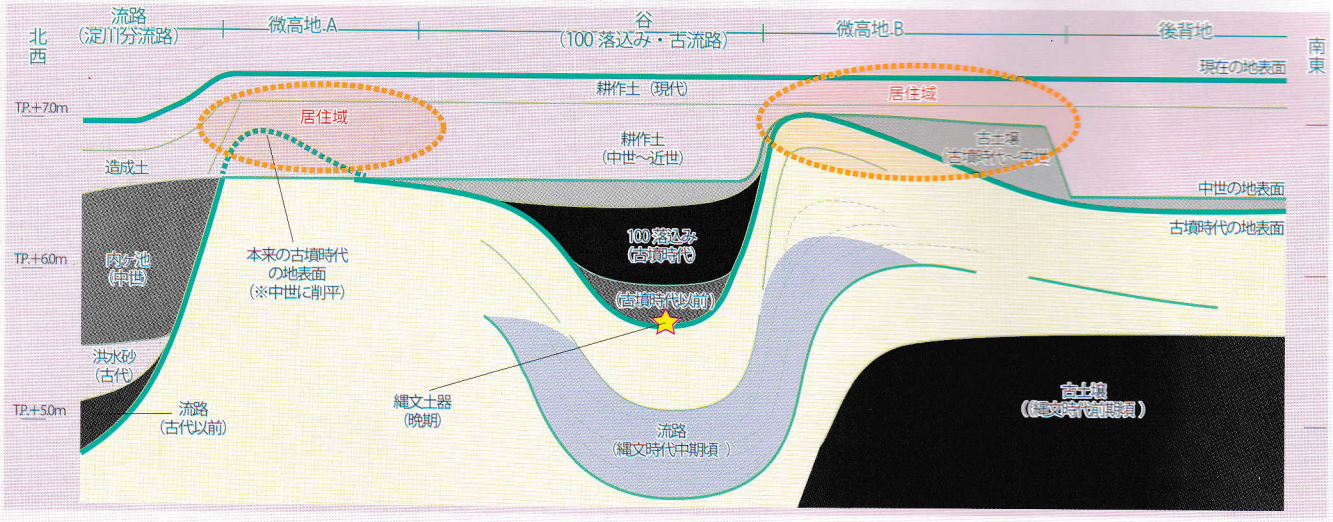
上牧遺跡は、高槻市上牧町・梶原中村町に所在し、関西電力淀川変電所の建設を契機に存在が確認された遺跡です。高槻市教育委員会によって昭和46･47年度に実施した発掘調査では、古墳時代初頭～前期と中世の遺構・遺物がまとまって確認され、当時としては珍しかった中世の集落の実態を明らかにした点が特筆される成果といえます。また、調査担当者であった橋本久和氏は、この遺跡から出土した大量の瓦器椀を中心にして近畿地方の瓦器椀の地域色と編年を確立したことから、全国的に著名な遺跡となりました。

これ以降は、長らく調査の機会がありませんでしたが、昨年度に今回の事業に先立って遺跡の範囲や内容を探るための試掘調査をおこなったところ、元の遺跡範囲の東側まで古墳時代や中世の遺構・遺物が存在することが明らかとなりました。そのため現在では、淀川の堤防から西150m地点まで遺跡範囲が拡大されています。

2．上牧遺跡をとりまく地形と周辺環境

遺跡は淀川右岸の堤防に隣接する沖積低地に立地しており、今回の調査では淀川本流の洪水による堆積で形成された微高地上で古墳時代の居住域（日常生活の場）が複数確認されています。厚さ約0.3mの現代の耕作土を除去すると、微高地の最も高い部分が姿を現し、古墳時代の遺構・遺物がまとまってみつかりましたが、微高地は縄文時代晩期の土器の出土地点や地層深くに堆積する古土壌の放射性炭素年代測定の結果などから、縄文時代後期以前に形成されたことが判明しています。そのため、現在の平坦な地形とは異なり、古墳時代には古くから水に浸かりにくい安定した島状の高まりが数多く存在していたことがわかってきました。

調査地の西側に位置する内ヶ池は、淀川本流の古い名残（三日月湖・河跡湖）とみられますが、堤防が築かれる以前の淀川は、枝分かれしながら流れていたと考えられており、上牧遺跡は淀川の中州上に立地した遺跡とみなすことができます。また、この付近は北摂山地が淀川に最も近づく場所でもあるため、現在でも名神高



上牧遺跡における地形環境断面模式図

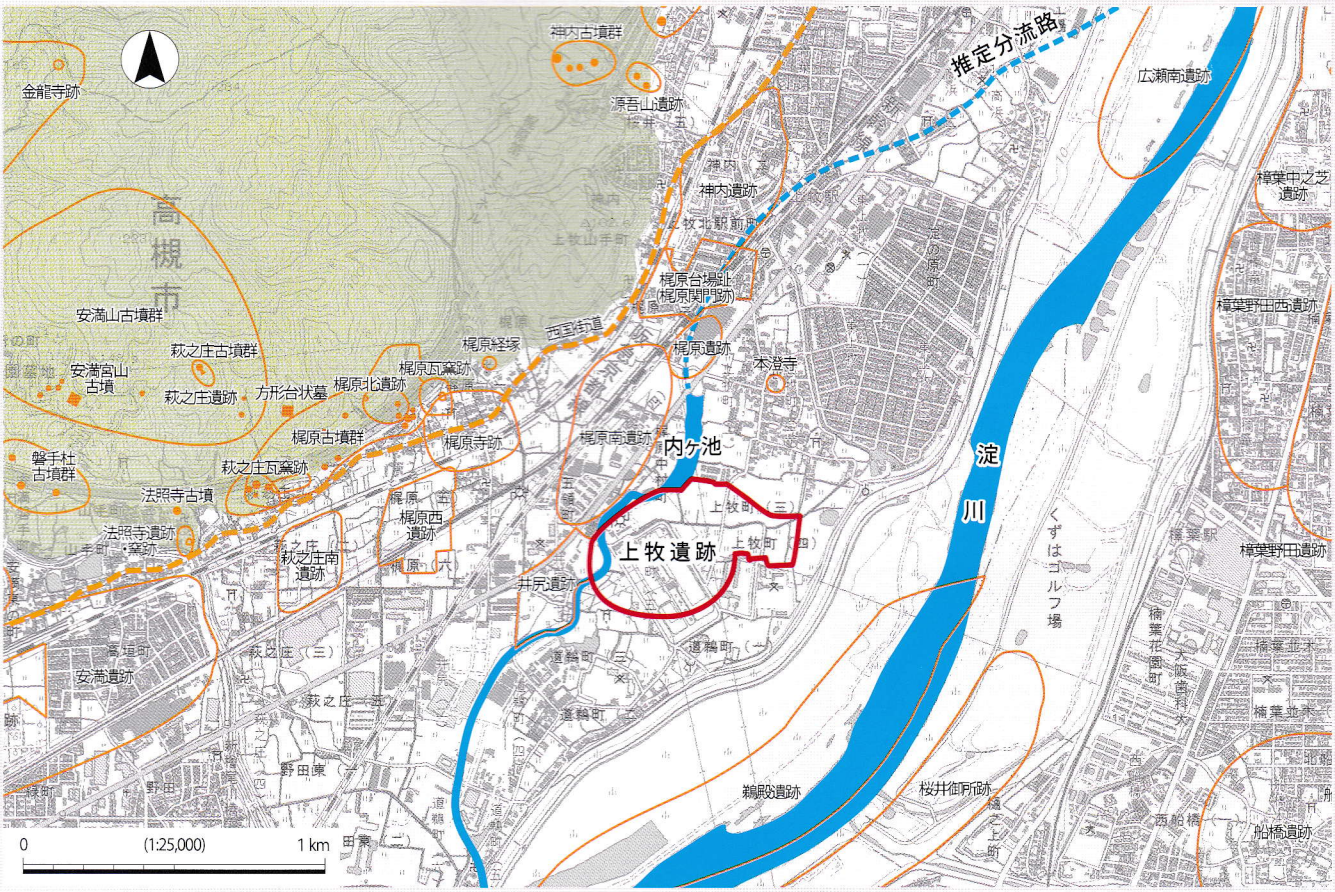
速道路や新幹線、JR 東海道線などの主要な交通インフラが集中しています。近世の西国街道は古代の幹線道路である山陽道と推定とされ、上牧遺跡から内ヶ池を挟んで北西側に位置する梶原南遺跡は大原駅家の有力な候補地でもあることから、古くからの交通の要衝といえる地勢的な特徴を有しています。

3．上牧遺跡周辺の遺跡

三島地域東部における代表的な集落遺跡である安満遺跡は、檜尾川の扇状地上に立地し、弥生時代前期には環濠を伴う居住域が出現し、これまでに 100 基以上の方形周溝墓や水田などがみつかっています。中期末頃から衰退しはじめ、それに代わって古曽部・芝谷遺跡や紅茸山遺跡、萩之庄南遺跡などが後期後半にかけて出現します。安満遺跡では、古墳時代を通じて遺構・遺物が確認されていることから、弥生時代末以降は規模は小さくなるものの、依然としてこの地域の中心的な集落であったことがうかがえます。

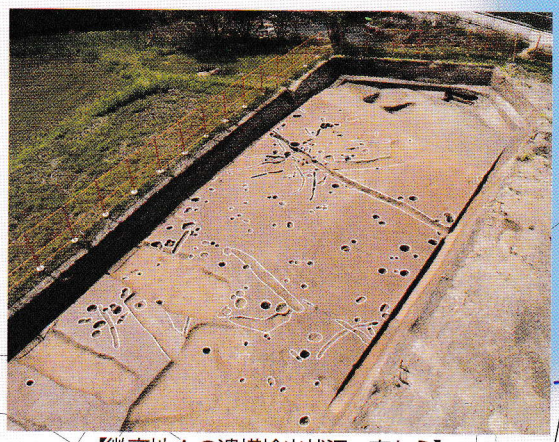
上牧遺跡の周辺では、井尻遺跡や梶原南遺跡で弥生時代中期～後期の遺物が出土し、神内遺跡や梶原西遺跡で弥生時代中期の方形周溝墓群がみつかっていることから、付近に小規模な集落が存在したとみられます。古墳時代に入ると当遺跡や井尻遺跡で遺構・遺物が増加し、井尻遺跡では古墳時代前期から中期の水路群や祭祀土坑などがみつかっています。特にその中でも、集落遺跡から石釧（腕輪形石製品）が出土した点は、たいへん珍しい事例であり、注目すべき成果といえます。古墳については、北方の丘陵上に青龍三年（235）の紀年銘鏡と三角縁神獣鏡が出土した安満宮山古墳や、石製装身具がまとまって出土した萩之庄１号墳などの前期古墳が築造され、後期では安満山古墳群や梶原古墳群をはじめとする横穴式石室を伴う群集墳が存在しています。

古代では、三島地域最古の古代寺院である梶原寺が７世紀後半（1,350 年前）に創建され、天平勝宝九年（757）には東大寺から 6,000 枚の瓦の生産を受注したことが知られていますが、これを裏付けるように背後の丘陵斜面では 7 世紀後半～ 8 世紀の瓦窯がみつかっています。ここから南東に位置する梶原南遺跡では、奈良時代の大型建物や倉庫群などがみつかっており、大原駅家の有力な候補地とされています。古代末から中世にかけては、井尻遺跡と上牧遺跡で 11 世紀（1,000 年前）と 13 世紀（800 年前）頃の屋敷地がみつかっており、これらは当地周辺での開発の進展に伴って新たに出現した集落とみなすことができます。



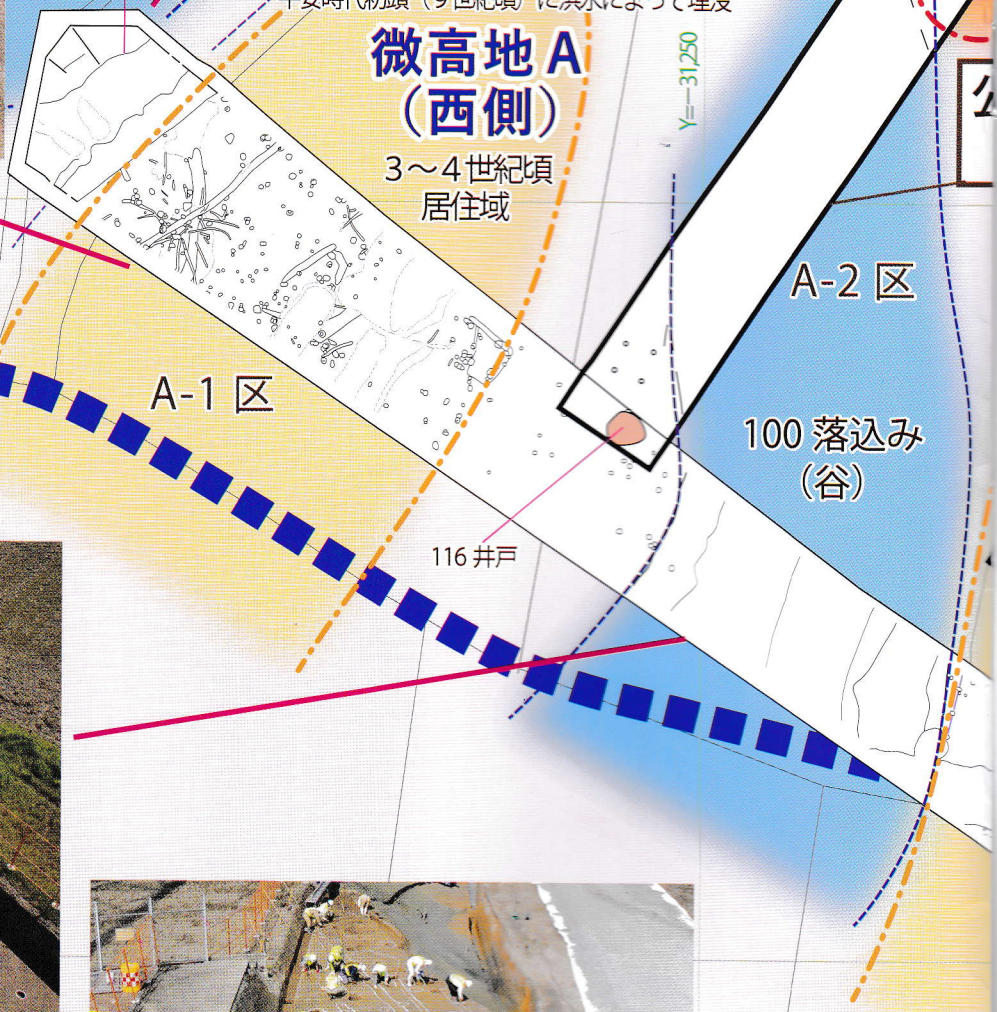
上牧遺跡の位置と周辺の遺跡

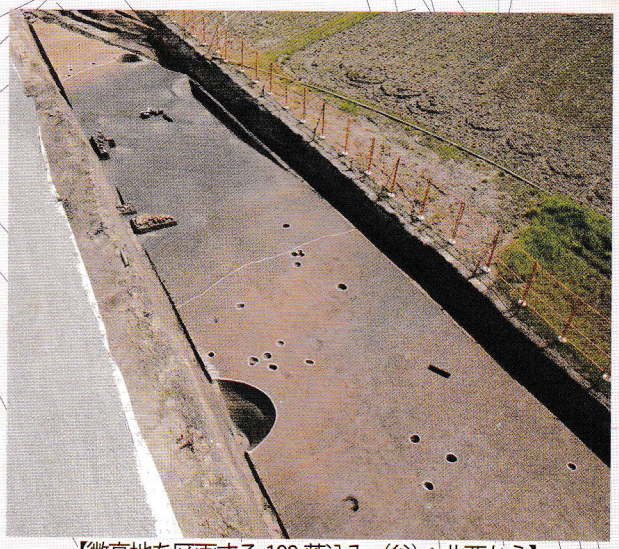
現在までの発掘調査成果の概要



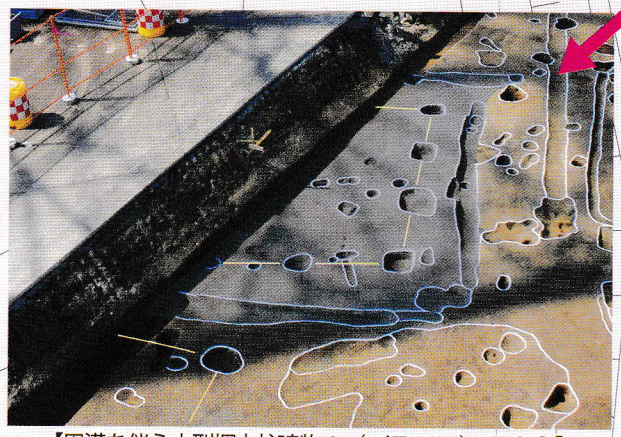
【微高地Ａの遺構検出状況：東から】
上面が後世の耕作で削り取られており、建物跡ははっきりしませんでした。ただし、柱穴や溝がまとまってみつかっているため、居住域であった可能性が推測できます。

【内ヶ池沿いの古代の河川跡（淀川の旧流路）：西から】
平安時代初頭（９世紀頃）に洪水によって埋没

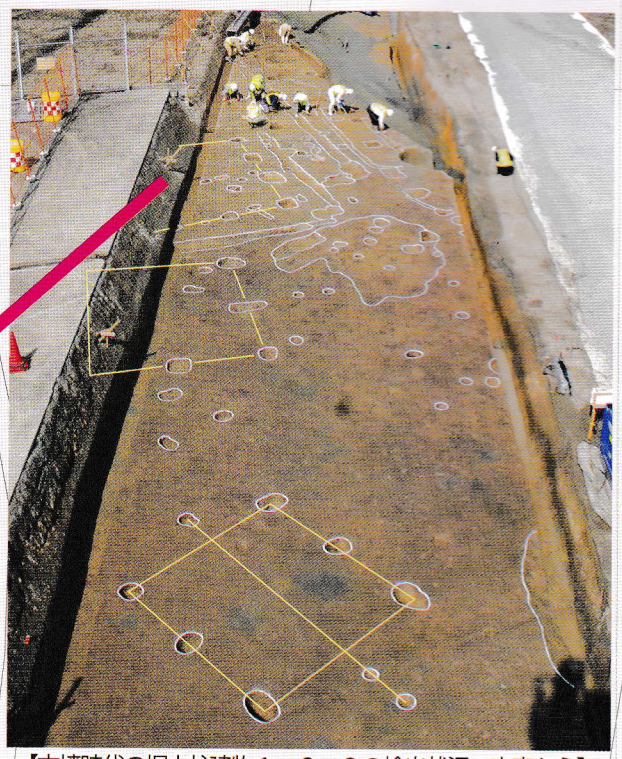




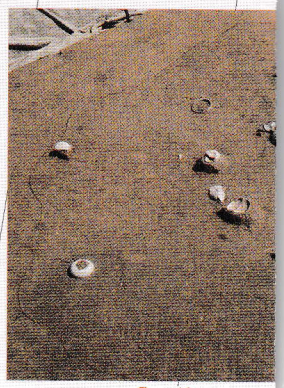
【微高地を区画する 100 落込み（谷）：北西から】
古い流路が窪地として残った落込み（黒い部分）
古墳時代を通じて土器が投棄されていました
手前の大きな穴は古墳時代前期前半の 116 井戸



【周溝を伴う大型掘立柱建物１（一辺 5.3m）：西から】
古墳時代中期中頃～後半頃（５世紀中頃～後半）



【古墳時代の掘立柱建物１・２・３の検出状況：南東から】
微高地頂部付近に遺構が密集しています



【33 落込みの遺
集落廃絶期の古墳時代後期前

【古墳時代初頭～前期頃（3～4世紀頃）の竪穴建物：北東から】
中世～近世の水路（写真手前）によって削平されています

【古墳時代初頭頃（3世紀中頃）の32井戸】
（写真上）上面から出土した土師器
（写真下）底から出土した土師器の壺と甕

物出土状況：西から】
半頃（6世紀初頭～前半）の遺物群

4．今回の発掘調査の成果

これまでにみつかった古墳時代の主な遺構・遺物は、以下の通りです。

〔竪穴建物 18 棟以上、掘立柱建物８棟以上、井戸２基、土器溜まり、落込み（谷）、周溝墓５基〕

（1） 古墳時代の建物跡

竪穴建物と掘立柱建物をあわせて、約 30 棟確認しており、その数は現在のところ三島地域東部で最多です。西側の微高地Ａが、後世に削平されていることなどをふまえると、本来の建物数はより多かった可能性が高く、さらに今後の調査の進展に伴ってさらなる増加も見込まれます。このことから上牧遺跡は、三島地域東部の中でも規模の大きな中核的な集落であったと考えられます。

竪穴建物は、いずれも古墳時代に一般的な方形四本柱の構造で、床面の遺存状態が良く、炉の痕跡がはっきりと残るものが多くあります。建物ごとに方位が異なっており、正方位に近いものから、新しくなるにつれ徐々に東に傾くようになることがわかってきました。正方位の建物群(図の赤)が古墳時代初頭～前期頃(３～４世紀、1,800～ 1,700 年前）であるのに対し、東に傾く建物群（図の青）がやや新しい中期前半頃（５世紀前半、1,600 年前）のものが多く、中間の一群（図の紫）はその間の時期と考えられます。正方位に近い古い時期の建物には、竪穴建物８や竪穴建物 13 のような一辺７m近い規模の大きな建物を含み、同じ場所で何度も建て替えられていた様子がうかがえます。その一方で、東に傾く新しい時期の一群は、やや小ぶりな一辺５m前後のものが多く、竪穴建物７や竪穴建物 11 では当時の生活面に土器などの遺物が残されていました。

掘立柱建物は、古墳時代中期中頃（５世紀中頃、1,550 年前）以降のものが多く、この時期を境に竪穴建物から掘立柱建物へと建物構造が変化したことがうかがえます。このように、ひとつの遺跡で長期にわたって集落が継続し、建物の構造が変化していく過程が具体的にわかることは非常にまれであり、貴重な調査事例といえます。掘立柱建物の中には、周囲に区画溝を伴う一辺 5.3mの規模の大きな掘立柱建物１や、建物規模は小さいものの神社建築との関連が指摘される独立棟持柱建物の掘立柱建物３などがあります。独立棟持柱建物については、時期がはっきりしませんが、建物は正方位に近い傾きで、古墳時代初頭の遺物がまとまって出土した 32 井戸に隣接することから関連性が推測でき、古墳時代前期以前に遡る可能性が考えられます。

（2） 周溝墓

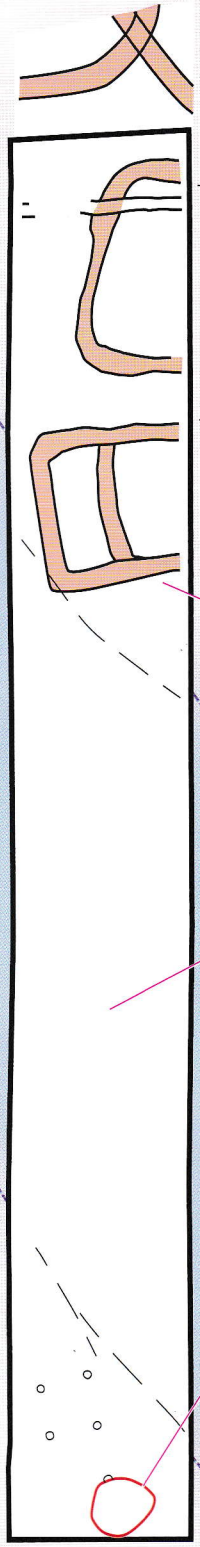
竪穴建物が多数みつかった微高地Ｂの北西で、周溝墓が５基みつかりました。いずれも隅丸方形で、５基のうち２基ずつが重複しています。規模は一辺６～９m前後に復元でき、埋葬施設は後世に削平されて残存していませんでした。周溝墓４・５からは土師器が少量出土していますが、詳細な時期は不明です。今回の調査では弥生時代の遺物がほとんど出土していないことや、周溝の形状などから、隣接する古墳時代の居住域に伴う古墳時代初頭～前期頃（３～４世紀、1,800～1,700年前）の墓と考えています。

（3）その他の遺構

居住域が存在する微高地の間や周囲には、落込み（谷）や後背地が存在しており、微高地Ａと微高地Ｂの間の 100 落込みからは、居住域から投げ捨てられた古墳時代の土器がまとまって出土しています。

微高地Ａと微高地Ｂの縁辺部では、それぞれ井戸が１基ずつみつかっていますが、このうち既に調査を完了した 32 井戸では、古墳時代初頭頃（３世紀中頃、約 1,750 年前）の土器がまとまって出土しています。この井戸には完形の壺や甕が８個体投げ込まれており、中央部には意図的に孔を開けられたものが多いことがわかりました。さらに壺・甕の中からは、桃の種が約 50 個出土しています。桃は、古代中国では邪気を払い長寿をもたらす神聖な果実とみなされ、日本でも纒向遺跡（奈良県）をはじめとして弥生時代から古墳時代の遺跡でまとまって出土しており、井戸の廃絶に際しておこなわれた祭祀の具体像を示す良好な資料といえます。

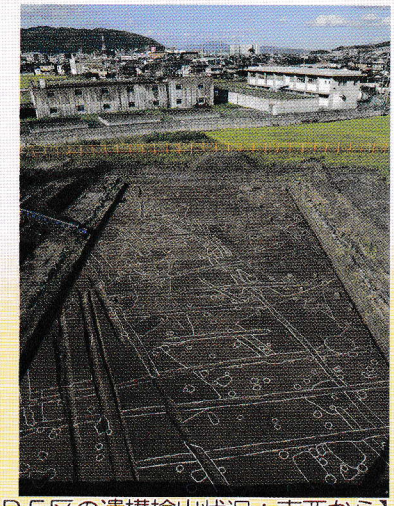
公開する調査区の成果と見どころ



周溝墓４・５
周溝から土師器
（調査済み）

【A－２区】

【周溝墓１・２・３の検出状況：南から】



【Ｐ５区の遺構検出状況：南西から】

周溝墓１
一辺 8.7m以上

450 落込み
須恵器・土師器が多数出土
古墳時代中期中頃

【Ｐ５区】
現地表面からの深さ約 0.3m

竪穴建物 13
一辺 6.7m、大型の建物
古墳時代前期前半～中頃か
竪穴建物 8→12→13 の順で建替え

周溝墓２・３
いずれも一辺６m以上
周溝墓２（外側）が新しい

0　(1:300)　10m

順

100 落込み
地表面からの深さ約 1.5m
今回の調査区では遺物の出土が少ない

432 土坑
二重口縁壺など土師器多数出土
古墳時代前期前半～中頃

竪穴建物 11
管玉出土、建替あり
古墳時代前期後半～中期前半頃か

路

116 井戸
完形の甕が出土
古墳時代前期前半頃

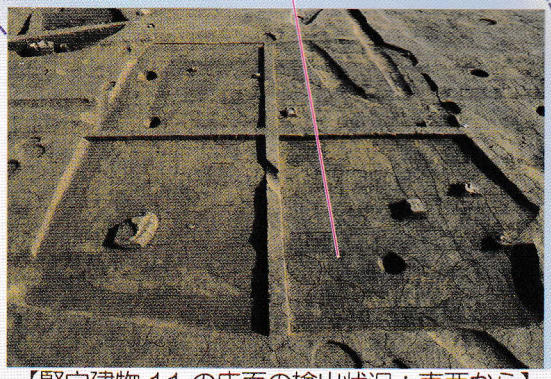
竪穴建物 8（外側）
一辺 6.7m、大型の建物
古墳時代前期前半以前か

【管玉出土状況】

竪穴建物 7
遺存状態良好、炉跡が明瞭
古墳時代初頭～前半頃

竪穴建物６
床面から土師器と初期須恵器が出土
古墳時代中期初頭～前半頃

※Ｐ５区の番号は
建物番号



【竪穴建物 11 の床面の検出状況：南西から】

【竪穴建物６の床面の遺物出土状況：南東から】

5．古墳時代以降の上牧遺跡

古墳時代後期後半（6世紀後半、1,450 年前）以降の遺物が、これまでにまったく出土していないため、この頃には集落は廃絶したとみられます。北方の丘陵部の梶原古墳群では、この頃を境に多くの横穴式石室をつくりはじめており、上牧遺跡の集落に住んでいた人々が北の山際に居住域を移動させた可能性も推測できます。

古代については、7～9世紀代（1,400～ 1,250 年前頃）の遺物がほとんど出土していないため、具体的な土地利用のあり方は不明です。この時期には、淀川沿いには公私の牧が多く設置されたとされ、今回の調査で明らかとなった窪地（落込み）に囲まれた島状に微高地が点在するような自然地形は、馬を囲い込んで放牧するのに適しています。「上牧」という地名から、牧場であった可能性を類推することもできますが、現状ではあくまで想像の域をでません。

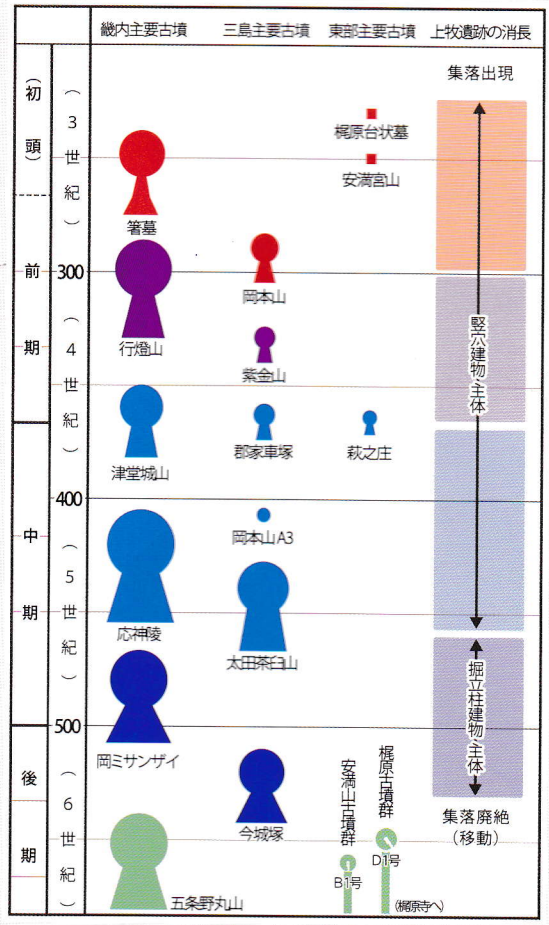
その後、調査地周辺では 11 世紀頃（1,000 年前頃）から徐々に耕地開発が進んだようであり、現況の耕作地の地割が中世までさかのぼることが明らかになってきました。その当時は、現在みられる平坦な地形が続く景観とは異なり、古くからの自然の凹凸が残されており、その名残が地割に反映されていることもわかってきました。また、今回の調査では中世の居住域は確認できませんでしたが、過去の調査で 13 世紀頃（800 年前頃）の屋敷地がみつかっており、付近には居住域が分散していた様子がうかがえます。

近世以降は、度重なる洪水によって徐々に地形の低い部分が埋まり、現在のような平坦に近い風景が形成されていったようです。調査地の東部では大規模な洪水痕跡が確認され、これに伴う耕地復旧のための田畑の天地返しの痕跡がみつかっていますが、これについては近世の淀川の洪水の履歴の中でも甚大な被害を及ぼした享和（きょうわ）二年（1802）の洪水痕跡の可能性が推測できます。

6．調査成果のまとめ

今回の発掘調査で、調査地周辺には安定した微高地の拡がりが確認され、古墳時代を通じて継続する集落の様子が明らかになってきました。確認された建物数は、三島地域東部ではこれまでのところ最大で、上牧遺跡がこの地域の中でも有力な集落のひとつであったことがわかってきました。居住域と墓域を同時に確認できる調査事例が少ないことや、地形に対応した土地利用のあり方、井戸に伴う祭祀の痕跡などといった、集落の具体像が明らかとなった点は重要です。淀川流域では発掘調査の機会が少なく、遺跡の実態が不明瞭でしたが、古墳時代の集落の景観や風景、当時のくらしぶりを垣間見ることができる貴重な調査事例になりました。

上牧遺跡と西側に隣接する井尻遺跡では、古墳時代初頭頃から集落が出現・発展することが今回や最近の調査で徐々に明確になってきましたが、その一方で弥生時代以来この地域の中心的な位置を占めてきた安満遺跡は集落の規模を縮小化させつつあり、地域内の集落の盛衰は相互に連動する現象とみることも可能です。また、淀川分流路である内ヶ池に面し、北摂山地が最も淀川に迫る水上交通と陸上交通の結節点ともいうべき遺跡の立地も、集落の出現背景を考える上では重要といえます。さらにこの時期には、北摂山地からのびる丘陵上に安満宮山古墳や、加飾壺（かしょくつぼ）を伴う梶原古墳群の方形台状墓（ほうけいだいじょうぼ）などの有力な古墳・墳墓が存在しており、古墳時代のはじまりの時期に出現する有力墳の築造背景に迫るための手がかりになるかもしれません。



古墳の消長と上牧遺跡の動向

高速自動車国道近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う

上牧遺跡　現地説明会資料

淀川流域における古墳時代集落の発掘調査成果

編集・発行　公益財団法人大阪府文化財センター
〒590-0105　堺市南区竹城台３丁21番４号
発行日　平成30年10月27日